

# आयुस्、あーゆす

(発行) 京都文教大学・京都文教短期大学図書館  
京都府宇治市槇島町千足80

## ★ 渡辺浩著『明治革命・性・文明—政治思想史の冒険』を読んで ★

京都文教大学・京都文教短期大学図書館長

総合社会学部・教授(植民地主義・帝国研究) 遠藤 央

東京大学出版会創立70周年記念出版であり、堅そうな本に見えるがとても読みやすく、面白い本なので紹介したい。本の帯にはつぎのように書かれている。「わずか4隻の米国船の渡来をきっかけに徳川体制は動揺し、すみやかに崩壊した。何が起きたのか。大変動を生きた人々の、政治や人生をめぐる思いとは？そして、彼らにとって「男らしさ」「女らしさ」とは？常識を根底から覆す、驚きに満ちた冒険の書」。

第1章 「明治維新」論と福沢諭吉 からして興味深い論文である。この章はもともと講演だったということで、「です、ます」調で書かれている。以下に内容を要約してみる。

「徳川体制崩壊後の変革は徹底的でした。政治・社会・法制・経済・教育・文化・芸術・言語、あらゆる領域で大きな変化が生じました。……一般論によりかかって説明することはできない。徳川体制それ自体の固有の理由、特有の原因によって、このような特殊な革命が起きたと考える他ありません」。

「『尊王』『勤王』の精神が昂まって維新へ、天皇の政府へ、というのは、表面のいわば口実に過ぎなかったのではないかと、それを真に受けて、あるいはその真相を隠して、維新とは永年培われ、育ってきた『尊王』論がついに政治的力となり、実現した過程だと無邪気に言って良いのか、はなはだ疑問であると思います」。

「結局、明治維新を単純に『尊王攘夷の変革』と考えるのは、表面・口実を真に受けて現実を無視した、おめでたすぎる解釈ではないかというこ

とになります。それは、何かのために便利で有効なスローガンだった。問題は、その「何か」ではないだろうか、ということです」。

「私もナショナリズム革命論には一理あると思います。しかし、どうも『攘夷』論者と明治政府の事後的な自己正当化を、かなり真に受けてしまっているのではないかと、少なくともそういう面がかなりあるのではないかと、そう考えます」。

こうした問題意識で最後の第5節で福沢諭吉をとりあげて「自由」が論じられる。「彼が強調しているのは、第一に、『尊王』や『攘夷』というスローガンを真に受けてはいけないということです。第二に、維新は人民が「自由」を求めて、『暴政府』即ちティラニーtyrannyを打倒したのだということです。……少なくとも明治維新の根本原因の説明としては、本当に福沢諭吉のそれが最も正しいのではないかと、私は、今、そのように考えております。つまり、明治維新とは、何よりも「自由」のための革命だった、ということです」。

第6章 どんな「男」になるべきか—江戸と明治の「男性」理想像 や 第7章 どんな「女」になれている—江戸と明治の「女性」理想像も興味深い内容で、家族・ジェンダー論の授業で紹介しようと思っているが、ここでとりあげる前に紙数が尽きてしまった。

(えんどう ひさし)

『明治革命・性・文明—政治思想史の冒険』  
渡辺浩著 / 東京大学出版会 (2021.6)

## ❖❖❖ こだわりについて ❖❖❖

臨床心理学部・講師（臨床心理学） 浦野由平

私は外出するたびに、ついつい本屋に立ち寄ってしまうところがある。本屋といっても、駅前にあるような小さな本屋ではなく、専門書を数多く並べている大型書店である。旅行で遠出しているときも、国内外問わず、周辺に大きな本屋があれば立ち寄ってしまう。中に入ると、まずは新作のコーナーに並べられた本を眺め、次に自分の専門領域に関連しそうなコーナーを探し、そこで興味を惹くタイトルを見つけてはパラパラと立ち読みする。それを繰り返しながら、気になる本をいくつかピックアップし、そのうち数冊を購入して家路につくことが多い。そうして持ち帰った本を見て、「先週買った本も読んでいないのに、また買って来たの」と家族に呆れられるところまでが一つのサイクルである。

そのようにして購入した本が家の本棚を埋め尽くしている。最近では置く場所がなくなってきたので、作業机や階段の上にも積んでいる。段々と生活するスペースが侵食されているが、私は本を「買った」ことを決して後悔していない。私は本を「借りて」読むよりも「買って」読むほうがよいと考えており、「買う」ことにこだわっている。理由はいくつかある。1つには、折り目をつけても誰にも怒られることがなく、罪悪感を抱く必要がないこと。本を読むときに気になった箇所折り目をつけてしまう癖があるので、買った本を読むほうが気楽である。2つ目は、何を書き込んでも良いこと。実際に書き込むことは多くないが、「何かあれば、気になったことを書き込んで良い」という自由が保障されているのはありがたい。最後は、図書館で借った場合よりも買った場合の方がなぜか集中して読めることが多いから

である。そのため、興味を持った本はできる限り買って読むようにしている。ただし、だからといって「借りて」読むことが全くないということではない。専門書の中には、ふらっと立ち寄って買える本と買えない本がある。数万円にもなる専門書は、気軽に個人が購入できるものではない。特に学生時代は限られたお金の中でやりくりするので、高価な本はおいそれと買えない。そういうとき、図書館の存在はとてありがたい。

本について、もう一つこだわりがある。それは、「本を最初から最後までしっかり理解し読み切る」ということにこだわらない、ということである。私は興味関心に任せて、同時並行で数冊の本を行き来することが多い。そのときの気分や興味にしたがって読む本を選ぶので、Aという本は60ページ、Bは100ページ、Cは10ページ、Dは…というように、読書の進捗はまちまちである。途中までしか読んでいない本が多くあるが、特に気にならない。私の場合、「最後まで読み切らないといけない」と自分を縛ってしまう方がストレスに感じてしまう。もちろん、しっかりと内容を理解したい専門書であれば精読するが、ほとんどの本（興味はあるが、自分にとってどれほど重要か不確かな本）については、いろいろと行き来しながら読んでいく。

これまで色々と試しながら読書を続けてきたが、その中でこれらのこだわり（もしくはスタンス）が定着してきたように思う。大学生の間は、色々なことを試せる貴重な時期なので、学生の皆様にはぜひ試行錯誤しながら自分なりの「こだわり」を見つけてほしい。

（うらの ゆうへい）

## 🌟🌟🌟 「行間を読む」 🌟🌟🌟

総合社会学部 総合社会学科3回生 山本真衣

文字になっていない部分から物語の真意や筆者の意向を感じ取る。「行間を読む」とは、こうしたことを意味すると思う。そして、本を読むことの面白さは「行間を読む」ことにあると考える。登場人物の台詞や情景描写の裏にあるメッセージを読み解き、はっきりと言葉にされていない場面を想像するのは実に楽しい。物語の余白を埋める作業は、読み手の感性を豊かにさせる。何より、想像された世界は、一人ひとり描かれ方が異なる。そこに、正解も不正解もない。だから、面白い。

事細かに説明された描写は、確かに分かりやすい。その上、読み手を迷わせることなく、正しい解釈へと導いてくれる。けれども、それでは少しつまらないとも感じてしまう。台詞ですべてを示さない。読み手の想像に物語の解釈を委ねる。人それぞれ、メッセージの受け取り方が異なるように、同じ人物であっても、その時の立場や状況、心情、経験によって解釈の仕方は変化する。私が「今」、物語の余白から思い描いた世界と、「5年後」「10年後」、物語の余白から思い描いた世界では、きっと違うものになるだろう。

一見すると、意味のないように思える描写でも、そこに意味を見出そうとすることは、かえって“意味のある”時間なのかもしれない。行間を読ませる作品は、物語の余韻を強く深く残し、何度も読み返したくなる。

現在放送中のNHKのテレビドラマシリーズ『連続テレビ小説 おかえりモネ』は、“行間を読ませる”作品であると私は感じている。登場するすべての人物が多くを語らない。演者の表情や仕草、台詞と台詞の間、無言の時間、画面に映っていないところで起こっているはずの出来事など、ドラマの中では語られない余白が点在している。私たち視聴者は、想像することを通してこの余白を埋めていく。そうして、作品と深く関わり合っていく。

説明を求めすぎれば、台詞やナレーションで埋め尽くされた作品になってしまう。描かれていな

い部分を、作品の世界を想像することで描いていく。毎日15分ずつの物語は、一枚一枚ページをめくるよう進んでいく。テレビドラマでありながら、あくまでも連続テレビ「小説」であると感じていく。

どのような本も繰り返し読んでいくうちに、新たな気づきに出会うことができる。読めば読むほど、物語の余白は輪郭を表し、やがてははっきりと見えてくる。選び、読み取った行間から何を感じるのか。前述したように、読み手それぞれ、受け取り方は異なる。一人ひとり違う感想を抱くということは、多面的で魅力あふれる作品だと示す何よりの証である。読み手と書き手との相互作用によって、物語はより鮮やかに色付いていくのではないだろうか。

本を読んでいるとき、まるで自分自身に向けられた台詞ではないかと錯覚してしまいそうになる瞬間が、私は大好きだ。しかしながら、言葉というものは世界に縛りをかけてしまうようにも思う。だからこそ、そうでないところに自分自身の思いを投影することで、自由な世界をつくり出す。前者の限定的な世界は、シンプルかつ分かりやすいものである一方、後者の制約のない世界は、想像的かつ創造的なものである。物語の本筋を捉え、言葉になっている部分から作品を楽しむだけでなく、物語の行間を捉え、言葉になっていない部分からも作品を楽しむ。このプラスアルファの楽しみが、本を読むことの面白さにつながっている。

本に触れ、言葉と出会い、その裏に隠れているはずの世界を想像する。手元のスマートフォンから、いつでも何でもすぐに正解を導き出せる、便利で分かりやすい今の時代だからこそ、「行間を読む」ことが求められていると素直に思う。物語の余白が生み出す余韻を感じることに、そして、じっくりと考えることがいかに大切なのか、本という媒体を通して感じた行間を読む楽しさが、私に新たな気づきを与えてくれる。

(やまもと まい)

+3

## 🍏🍏🍏 私のすすめる3冊（新学長推薦図書） 🍏🍏🍏

短期大学学長・食物栄養学科・教授（体育学・トレーニング学） 森井秀樹

### 「世界一シンプルで科学的に証明された究極の食事」

津川友介著（東洋経済新報社、2018）

普段の食生活を見直すきっかけとなった本です。エビデンス（科学的根拠）に基づいた「からだに良い食べ物」、「からだに悪い食べ物」は必見！ 毎日の食事が変わりました。ダイエットにも最適！

### 「炭水化物が人類を滅ぼす ―糖質制限からみた生命の科学―」

夏井睦著（光文社新書、2013）

著者は糖質制限ダイエットの火付け役の一人です。日本人の主食が糖質食になった歴史から糖質制限の方法まで紹介されています。私自身は、糖質の制限よりも、糖質をどのように摂るかが重要と考えています。

### 「科学的に正しい筋トレ：最強の教科書」

庵野拓将著（KADOKAWA、2019）

新しい生活様式のひとつとして、「宅トレ」がブームとなり、自宅で出来る筋力トレーニングが多様なメディアで紹介されるようになりました。この本には、筋トレの基礎知識、食事や睡眠など健康のためのポイントが紹介されています。カッコいいからだになりたい人 必見！

### 「体力の正体は筋肉」

樋口満著（集英社新書、2018）

加齢に伴う体力の低下は、筋肉量の減少が原因です。筋力を維持するための運動と食事について解説されています。中高齢者には、健康を維持するための最適なマニュアル本でしょう！

### 「イラスト図解筋力トレーニング：医・科学的根拠に基づくアプローチ」

松本秀男・今井覚志編集（文光堂、2019）

こんなに分かりやすい「筋トレ本」見たことない！ 単に筋トレの方法を説明したマニュアル本ではなく、部位別に目的と方法、そして注意点を分かりやすいイラストで示しています。ムキムキの身体を作るのではなく、健康な身体を作るのに最高の1冊です。

### 「運動処方：ケーススタディでみるACSMガイドライン」

阪本静男監訳（有限会社ナップ、2009）

ACSM（アメリカスポーツ医学会）が出版したガイドラインの訳本です。残念ながら、既に絶版となっていますが、授業を進める上で大変役立つ図書の本1冊です。運動の強度設定やエネルギー消費量の計算法は、現在に於いても、トレーニング機器に用いられています。凄い1冊です。  
(もりい ひでき)